通盛

観世流改訂謡本

内十五

二番目

通盛

七月

ツレ　小宰相局（前ハ若女）
シテ　平通盛（前ハ漁翁）
ワキ　僧　ワキヅレ　僧

早笛
これハ阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候。さても此浦ハ平家の一門果て給ひたる處なれバ痛はしく存じ毎夜此磯邊に出でゝ御經を讀み奉り候。

上歌
（上）唯今も出でゝ弔ひ申さばやと思ひ候
磯山に。暫し岩根の待つ程に。暫し

岩根の待つ程よ。誰が夜舟とハ白波よ。楫音ばかり鳴門の浦靜かなる今宵かな、浦靜かなる今宵かな、

ツレサシ上　一声　まづハ遠山寺の鐘の聲。此磯近く聞えけり、

シテ　入相ごさめれバ急ぎ給へ、

ツレ　程なく暮る日の數かな、

シテ　きのふ過ぎ

ツレ　けふと暮れ、

シテ　明日亦かくこそあるべけれ

ツレ　されども老に頼まぬハ　シテ　身の行く末の日數なり　いつまで世をバわたづ海の。あまりに隙も。波小舟　ツレ　何を頼みに。老の身の　シテ　命のためにつかふべき
地上歌　うきながら。心の少し慰むハ。心の少し慰むハ。月の出汐のあま小舟。さも面白き浦の秋の氣色かな。處ハ

夕浪の鳴門の沖に雲つゞく。淡路の島
や離れえぬ浮世の業ぞ悲しき浮世
の業ぞ悲しき　暗濤月を埋ん
で清光なし　舟に焚く海士の篝火
更け過ぎて。苫よりくゞる夜の雨の。
蘆間に通ふ風ならで。音するものも
波枕に。夢か現か。お経の聲の。嵐に

つれて聞ゆるぞや。楫音を静めぢから
ろを抑へて。聴聞せばやと思ひ候
たぞや此鳴門の沖に音するは 泊定
めぬ海士の釣舟ばよ さもあらぬ思よ
子細あり。此磯近く寄せ給へ 御よ
随ひさし寄せ見れば 二人の僧は巖
の上 漁の舟は岸の陰 蘆火の

影をかりそめに。お經を開き讀誦する

シテ ありがたや漁する業は蘆火を思ひ

よ ワキ よき燈火よ シテ 鳴門の海の

シテワキ二人 弘誓深如海歴劫不思議の機縁に

よりて。五十展轉の隨喜功徳品

地下歌 げにありがたや此經の。おもてぞ暗き

浦風も。蘆火の影を吹き立てゝ。聽聞

まるぞありがたき

上歌 龍女変成と聞く時ハ。龍女変成と聞く時ハ。姥も頼もしやおほぢハいふに及ばず。願も三つの車の蘆火ハ清くあかすべし猶々お経遊ばせ猶々お経遊ばせ

あら嬉しやな。火の光にて心静に御経を読み奉りてハ。まづ〱此浦ハ。

平家の一門果て給ひたる處なれば。毎夜この磯邊に出て御經を讀み奉り候。とり分きいたはしき人此浦にて果て給ひて候ぞ。委しく御物語り候へ

シテ「仰の如く或ひは討たれ。又は海にも沈み給ひて候。中にも小宰相の局こそ。や。

下　諸共に御物語り候へ

ツレ上「さる程に平家

の一門。馬上をあらため。海士の小舟に
乗り移り。月に棹さす時もあり
ここは都の遠き須磨の浦。思ひも
ぬ敵に落されて。げに名を惜む武士の。
磤馭盧島や淡路潟。阿波の鳴門に
著きにけり　さる程に小宰相の局
乳母を近づけ。いかに何とか思ふ。われ

頼もしき人〲は都に留まり。通盛は討たれぬ。誰を頼みてながらふべき。此海に沈まんとて。主従泣く〲手を取り組み船に臨み

さるにてもあの海にこそ沈まうずらめ

地下歌 沈むべき身の心にや涙のかねて浮むらん

上歌 西は何ぞ月の入る。西は何ぞ月の

のる。其方も見えぬ大方の。春の夜や

霞むらん涙もさらに曇るらん。乳母

なく〳〵取りつきて。此時の物思ひ君

一人に限らず。思しめしとまり給へと

御衣の袖にとりつくを。振り切り海に

いると見えて老人も同じ満潮の。底の水

屑となりにけり底の水屑となりにけり

中入

ワキ上歌（二人）ツヨク待謡「此八軸の誓にて。此八軸の誓にて。一人も漏らさじの。方便品を讀誦まる

▲能ノ時ハシテ出端ニテ出デワキ童子テ「如我昔所願」ト謡フ

ワキ上「如我昔所願　出端▲後シテ上「今者已満足　ワキ上「化一切衆生　シテ下「皆令入佛道の　地上「通盛夫婦お經にひかれて立ち帰る波の　シテ「あらありがたの。御法やな　ワキカン上「不思議やなさも艶めける御姿の。波に浮みて見

見え給へ。いかなる人にてましますぞ

ツレ「名ばかりはまだ消えはてぬあだ波の。阿波の鳴門に沈み果てし。小宰相の局の幽霊なり

シテ「今一人は甲冑を帯し。兵具いみじく見え給へば。いかなる人にてましますぞ

シテ「これは生田の森の合戦において。名を天下に揚げ。武将

●獨吟サシクセ

たゞし譽れを。越前の三位通盛。昔を語らん其ためよ。これまであらはれ出でたるなり

地サシ上 ●抑この一の谷と申すは。前は海。上は嶮しき鵯越。眞に鳥ならでは翔り難く。獣も足を立つべき地にあらず

シテ上 唯幾度も大手の陣を心もとなきぞとて

地中 宗徒の一門さし

能ノ時ハ
跡弔ひてたび給へ。ウ

遣はさる。通盛も其随一たりしが。忍
んで我が陣に帰り。小宰相の局に向ひ
すでに軍。明日にきはまりぬ。痛はしや
御身ハ通盛ならで此うちに頼むべき
人なし。われともかくもなるならば。都に
帰り忘れずは。なき跡弔ひてたび給へ。
名残惜みのお盃。通盛酌をとり。さて

盃の宵の間も。うたゝねなりし睦言は。たとへば唐土の。項羽高祖の攻を受け。数行虞氏が涙もこれにはいかで優るべき。燈暗うして月の光りさし向ひ。語り慰む所に。舎弟の能登の守は。早甲冑をよろひつゝ。通盛はいづくにぞ。などて遅なはり給ふぞと。呼ばゝりし

其聲の。あら恥かしや能登の守。我が
弟といひながら。他人より猶恥かしや。
暇申してさらばとて。行くも行かれぬ
一の谷の。所から須磨の山の。後髪ぞ
ひかるゝ。さる程に合戦も半なりし
かば。但馬の守經正もはや討たれぬと
聞ゆ。さて薩摩の守忠度のはては

いかに岡部の六彌太。忠澄と組んで討たれしかば。天晴通盛も名ある侍もがな。討死せんと待つ所に。あれを見よよき敵に
近江の國の住人に
近江の國の住人に。木村の源五重章が鞭を上げて駈け來る。通盛少しも騒がず。抜き設けたる太刀なれば。甲の。

眞向ちやうと打ち返して太刀をもてさし
違へ共よ修羅道の苦を受くる。憐
みをたれ給ひ。よく弔ひてたび給へ
讀誦の聲を聞く時は。讀誦の聲を
聞く時は。悪鬼心を和らげ。忍辱慈悲
の姿にて。菩薩もここに來迎し。成佛
得脱の。身となり行くぞありがたき

身をあり行くぞありがたき。

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
觀世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古感想	

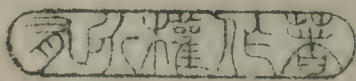
使用家の特權

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の右一組、或は三組を悉く買ひ揃へられ候節、往送料を添へて發行所へ送附せられれば、發行所は無料にて五番綴の美本に仕立直し、御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正八年四月二十日印刷
大正八年四月三十日發行

著作權所有

大正版 一番綴

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金屬版印刷所

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

PL
765
.K362x
v.1
no.15:2
UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
PL765.K362X C001
KANZE-RYU KAITEI UTAI-BON TOKYO
1:15:2
3 0112 031017012
門
觀世流改訂謡本
内十五

四番目
畧三番

櫻川(サクラガワ)

三月

子方　櫻子（謡なし）
シテ　櫻子ノ母
ワキ　僧　　ワキヅレ　従僧二人
ワキヅレ　里人
ワキヅレ(男)　人商人

男詞

かやうに候者ハ。東國方(トオゴクガタ)の人商人(ヒトアキビト)にて候。われ久しく都に候ひしが。此度ハ筑紫(ツクシ)日向(ヒウガ)にまかり下(クダ)りて候。又きのふの暮(クレ)ほどに幼(ヲサナ)き人を買ひ取りて候。かの人申され候ハ。此文(フミ)と身の代(シロ)とを。櫻の馬場(バヾ)の西にて櫻子の母(ハヽ)を尋ねて。たしかに

届けよと仰せ候程に。唯今櫻子の母の方へと急ぎ候。」此あたりにてありけるに候。まづ〳〵案内を申さばやと存候。」いかに案内申候。櫻子の母の渡り候か

シテ「誰にて渡り候ぞ

男「さん候櫻子の御方より御文(フミ)の候。又此代物(シロモノ)をたしかに届け申せと仰せ候程に。これまで持ちて参り

て候。かまへてたしかに届け申されて候

シテ　おら思ひよらずや。まづ〳〵文を見うずるにて候。さても〳〵此年月の御有様。見るもあまりの悲しさに。

地　人商人に身を売りて。東の方へ下り候。

カケテ　のう其子は売るまじき子にて候ものを。やおら悲しや。はや今の人も行き方

●小謡

知らずておりてゆかいさよ。これを出離の縁として御様をもかへ給ふべし。唯返す返すも御名殘こそ惜しう候へ

地下歌

名殘惜しくは何しように添ひで母には別るらん

上歌

ひとり伏屋の草の戸の。ひとり伏屋の草の戸の。明かし暮して憂き時も子をこそ見れば慰むよ。

きりとてハ我が頼む。神も木華開耶
姫の。御氏子なるものを櫻子とめて
たび給へ。さまなきたよ住みうかれたる
吉里の。今ハ何より明暮を。堪へて住
むべき身ならねど。我が子のゆくへ尋
ねんと。泣く泣く迷ひ出でゝ行く泣く
泣く迷ひ出でゝ行く。

中入

口上次第上（三人）ツヨク
須待ちえたる櫻狩。須待ちえたる櫻狩
山路の春ぞ急がん

口上詞
これは常陸の國
磯部寺の住僧にて候。又これに渡り候
幼き人ハ。いづくとも知らぬ愚僧を頼む
由仰せ候程に。師弟の契約をなし申し
て候。又此あたりに櫻川とて花の名所
の候。今を盛の由申し候程に。幼き人を

伴ひ。唯今櫻川へと急ぎ候。上歌（三人）筑波山。

このもかのもの

このもかのもの花盛。このもかのもの

花盛。雲の林の影繁き。緑の空も

うつろふや松の葉色も春めきて。嵐

も浮む花の波。櫻川にも着きにけり

櫻川にもつきにけり シテツレ詞 いかに申候。

何とて遅く御出で候ぞ待ち申して候

ワキ〽さん候皆〻御供申候程に。さて遅(オソ)なは(ワ)りて候。あら見事やな。花ハ今を盛(サカリ)と見えて候

ワキヅレ〽なか〳〵の事花ハ今が盛にて候。又こゝに面白き事の候。女物狂の候が。美しき抄(スクイ)網(アミ)を持ちて。櫻川に流るゝ花を抄(スク)ひ候が。けしからず面白(オ)う狂ひ候。これに暫らく御座候ひて。此物狂を幼(ヲサナ)

き人にも見せ参らせられ候へ　ワキ　さらば

その物狂を此方(コナタ)へめされ候へ　ワキツレ　心得

申候。やあ〳〵かの物狂よ。いつもの如く

抄網(スクイアミ)を持ちて。こなたへ来れと申候へ

後シテ上　一声　ヨワク　いかにあれなる道行人(ミチユキビト)。櫻川に花の

散り候か。何散りかゝりたるとや。

悲しやな。さなきだに行く事やすき

春の水の流るゝ花をや誘ふらん。花散
れる水のまに〳〵とめくれば。山にも
春はなくなりにけりと歎く時は。少し
なりとも休らはで。花よや疎く雪の色。
櫻花櫻花。散りぬる風のなごりには
水なき空よ。波ぞたつ　おもひも深き
花の雪　散るはなみだの。川やらん

シテサシ

これは出でたる物狂の。故郷は筑紫日向のもの。さも思ひ子を失ひて。思ひ乱るゝ心筑紫の。海山越えて箱崎の。浪立ち出でゝ須磨の浦。又は駿河の海過ぎて常陸とかやまで下り来ぬげよや。親子の道ならざれば。遙けき旅をいとはせん。こゝは又名に流れたる櫻川にて。

●小謡

さも面白き名所あり。別れし子の名も櫻子なれば。かたみぞといひちとうからとひ。名もなつかしき櫻川に　地下歌　散り浮く花の雲を汲みてみづから花衣の春の。かたみ殘さん。上歌　花鳥の。立ち別れつゝ親と子の。立ち別れつゝ親と子の。行くへも知らで天ざかる。鄙の長道よ衰へぬ。

たとひ逢ふとも親と子の面忘れせばいか
ならん。うたてや暫しこそ。たどりして
見えずとも。今は春べなるものを。我が子の
花はなど咲かぬ我が子の花はなど咲かぬ・
ワキ「此物狂の事ありげに候。立ちよりて
尋ねばやと思ひ候。「いかにこれなる狂女。
おことの國里はいづくの人ぞ シテ「これは遙

生きて離れて候程に　トモ

の筑紫の者にて候　ワキ　それは何とて
かやうに狂亂とはおなりたるぞ　シテ　さん候唯
一人ある忘れ形見の緑子に生きて離
れて候程に。思ひ亂れて候　ワキ　あら傷はし
しやな。又見申せば美しき抄網をもち。
流るゝ花をすくひ。おもまつきへ渇仰の
氣色見え給ひて候が。何と申したる事

まで候ぞ　シテ「さればわれらが古里の御神なれバ。
木華開耶姫と申して。御神體ハ櫻木
にて御入り候。されバ別れし我が子も其
御氏子なれバ。櫻子と名づけ育てしかバ。
神の御名も開耶姫。尋ぬる子の名も
櫻子にて。又此川も櫻川の。名もなつか
しき。花の散るをあだにもせじと思ふ

なり 謂を聞けば面白やげに何事も縁ある事ぞかし遠き筑紫より此東路の櫻川まで下り給ふも縁よのう まづ此川の名に負ふ事遠きよりつきての名譽ありかの貫之が歌はいよいよ げに 昔の貫之も遙けき花の都より 未だ見もせぬ常陸の

國に名も櫻川ありと聞きて

地上歌 常よりも春べになれば櫻川。春べになれば櫻川。波の花こそ間なく寄すらめと詠みたりし花の雪も貫之も古き名のみ殘る世の。櫻川。瀬々の白浪繁けしぞ。霞も流れも。言たの浮島の浮め浮め水の花げに面白き河瀬かなげに面白き

ハゝゝ

河瀬が有。（口上付）いろ／＼申候。此物狂ハ面白う

狂にと仰せ候が。けふ(キョウ)ハ何とて狂ひ候は(ワ)

ぬぞ　（口上ツレ）さん候。狂は(ワ)するやうが候。櫻川に

花の散るを申候へば狂ひ候程に。狂は(ワ)

せ御目にかけうずるまでで候　（口上）急いで

御狂はせ候へ　（口上ツレ）心得申候。あら笑止(ショオシ)や。

俄(ニワカ)に山嵐(ヤマオロシ)のして櫻川に花の散り候に

シテ「よしなき事など夕山風の。奥ある花を
誘ふぞさめれ。流れぬ先よ花をくまん
ワキカヽル上「げによく見れば山風の。木々の梢よ
吹き落ちて シテ「花の水嵩は白妙の
ワキ「波かと見れば上より散る シテ「櫻か ワキ「雪か
シテ「波か ワキ「花かと シテ「浮き立つ雲の ワキ「河風よ
地次第上「散ればぞ波も櫻川。散ればぞ波も櫻川。

●獨吟サシクセ

流るゝ花をせくなん　花の下に。帰らん事を忘れしは。水の雪を受けたる。花の袖　それ水流花落ちて春とこしなへにあり　月凄しうして風高うして鶴かへらず　●岸花紅に水を照らし。洞樹翠にして風を含む　山花開けて錦に似たり。澗水たゝへて藍の如し

●仕舞クセ留マデ

シテ「面白や思ひぞとよらかれまで　地「名も

なつかしみ櫻川の。一樹の蔭一河の流。

汲みて知る名も所からあひよあひなば

櫻子の。これ又他生の縁なるべし

クセ ●げにや年を經て。花の鏡となる水は。

散りかゝるをや曇ると云ふらん。眞散り

ぬれば。後は芥となる花と思ひ知る身も

さていろは。われも夢なるを花のみを
見るぞはかなき。されば梢よりあだよ
散りぬる花なれば。落ちても水の哀ふ
いさ白波の花よのみ。散れしも今われ
さきだゝぬ悔の八千度百千鳥。花よ
散れゆく徒身は。はかなき程よ涙ま
れて。霞を憐み露を悲しめる心なり

シテ上 さるにても。名のみ聞きて遙々と
地 思ひ渡りし櫻川の。浪かけて常陸
帯の。かごとばかりも散る花を。あだにな
ながしそ水をせき雪をたてゝ浮浪の。
花の柵かけまくも。かたじけなしや
これとても。木華開耶姫の御神木の
花なれば。風もよぎて吹き水も影を

●仕舞 綱の段

濁すかと。袂をひたし裳裾を萎らか

して花よるべの。水せきとめて櫻川よ

い、、、、、、う

なさけよ

シテ　・あたら櫻の

地　あたら

櫻の。とがは散るぞ恨むる。花もうし

風もつらし。散ればぞ誘ふ

シテ　誘へばぞ

散る花葛

地上　かけてのみ眺めしは

シテ　なほ青柳の糸櫻

地上　霞の間よそ

シテ「かざし櫻 地「雲と見しハ シテ「三吉野の

地「三吉野の。三吉野の。川淀瀧つ波の。

花をさそひし若し。國栖魚やからまし。

えハ櫻魚と聞くもなつかしや。いづれも

白妙の。花も櫻も。雪も波も皆からよ。

まくひ集め持ちたれども。これハ木〻

の花まことハ。我が尋ぬる櫻ぞ戀しき

我が櫻子ぞ戀しき。ロンギ上 いかにやいかに狂人の。言の葉聞けば不思議やな。若しも筑紫の人やらん シテ上 今までハ。誰とも。しらや不知火の。筑紫人かとのたまふハ何の為よ問ひ給ふ 地上 何をか今ハ包むべき。親子の契りもせぬ。花櫻子ぞ御覧ぜよ シテ中 櫻子ぞ。櫻子ぞ。

聞けば夢かと見も分かぬぞいづれ我が子なるらん　三年の日數程ありて。別も遠き親と子の　もとの姿ハ變れども　さすが見馴れし面だてを　よく〳〵見れば　櫻子の。花の顔ばせの。これハ子なりけり鶯の。同じ時も鳴く音こそ　嬉しき涙なりけれ　かくて伴ひ立ち

帰り。かくて伴ひ立ち帰り。母をも助け
様変へて。佛果の縁となりにけり。
二世安楽の縁深き。親子の道であり
がたき親子の道でありがたき

山姥
觀世流改訂謡本
内十五
PL
765
.K362x
v.1
no.15:3

五番目
略脇能（雪月花舞）

山姥

無季

ツレ　遊女山姥
シテ　山姥
ワキ　従者

善き光ぞと影頼む。善き光ぞとかげ頼む佛の御寺尋ねん　これは都方に住まひ仕る者にて候。又これに渡り候御事は。ひやく萬山姥とて隠なき遊女にて御座候。かやうに御名を申事は。山姥の山廻するといふ事を。

曲舞に作つて御謡ひあるにより。京童の申し慣はして候。又此頃は善光寺へ御参ありたき由仰り候程に。某御供申し。唯今信濃の國善光寺へと急ぎ候

サシ上 都を出でゝさゝ波や。志賀の浦船こがれ行く。末は有乳の山越えて。袖に露散る玉江の橋。かけて末ある越路の旅。思ひ

やるこそ遠きなれ　上歌（三人）梢波立つ汐越の。
梢波立つ汐越の。安宅の松の夕煙。消
えぬ憂き身の罪を斬る。弥陀の剣の
礪波山。雲路うながす三越路の。国の
末なる里とへば。いつぞ都は遠ざかる。境川
にも着きにけり境川にも着きにけり

ワキ　御急ぎ候程に。これははや越後越中の

境川に御着きにて候。暫くこれに御座候ひて。猶ゝ道の様躰をも御尋ねあらうずるにて候

常に承る（トモ）

げにや常に承る。西方の浄土ハ十萬億土とやこれハ又弥陀来迎の直路なれバ。上路の山とやらんに参り候べし。そも修行の旅なれバ。乗物をバこれに留めおき。徒跣

まで来りぬべし。道を変へてたびゆく

ワキ詞 あら不思議や。暮れまじき日にて候が

俄に暮れて候よ。さて何と仕るべき（何と仕るべき とも）

シテ上二 のうのう旅人お宿参らせうのうこれは

上路の山とて人里遠き所なり。日の（人里遠き所 とも）

暮れて候へば。わらはが庵にて一夜を

明かさせ給ひ候へ ワキ あら嬉しやな。

俄に日の暮れ前後を忘じて候。やがて参らせうずるにて候。今宵のお宿参らする事。取り分き思ふ子細あり。山姥の謡の一節謡ひて聞かせ給へ。年月の望なり。鄙の思出と思ふべし。其為にこそ日を暮らし。御宿をも参らせて候。いかさまにも謡はせ給ひ候へ

〽これは

思ひもよらぬ事を承りものかな。さて
誰と見申されて。山姥の謡の一節をハ
御所望ありけるぞ シテ詞 いや何とて包み給ふらん。
あれにまします御事ハ。ひやくま山姥
とて隠れなき遊女にておはしますぞや。
まづ此謡の次第とやらんよし足引
の山姥が。山めぐりすると作られたり。

あら面白や。これは曲舞によりての異名。さて眞の山姥をばいかなる者とか知ろし召されて候ぞ

ワキ　山姥とは山に住む鬼女とこそ曲舞にも見えて候へ

シテ　鬼女とは女の鬼とや。よし鬼なりとも人なりとも。山に住む女ならば。わらはが身の上にてはさむらはぬか。年須色

まをいたゞかせ給ふ。言の葉ぐさの露
程も。御心にかけ給はぬ。恨申しに來り
たり。道を極め名を立てゝ。世上萬徳の
妙花を開く事。此一曲の故ならずや。
然らばわらはが身をも弔ひ。舞歌音
樂の妙音の。聲佛事をもなし給はゞ。
などかわらはも輪廻を遁れ。歸性の善

處よ至らざらんと　怨をタ山の鳥

獸も鳴き添へて聲を上路の山姥が。

靈鬼これまで来りたり　不思議の

事を聞くものかな。さては眞の山姥の。

これまで来り給へるか　われ國々の

山廻りけふしもここに来る事は。我が名の

徳を聞かんためなり。謡ひ給ひてさりと

てハ。我が妄執を霽らし給へ　ツレカン上 此上ハ
とかく辞しなバ恐ろしや。我も身の為や
悪しかりなんて。憚りながら時の調子を。
とるや拍子を進むれバ　シテ詞 志ざしさせ
給へぞとてもさらバ暮るゝを待ちて月
の夜声に謡ひ給はゞ。我も亦。真の
姿を現はすべし。すハや影ろふ夕月の

上歌

さなきだに。暮るれど急ぐ深山べの

地

暮るれど急ぐ深山べの。雲に心をかけ
添へて。此山姥が一節を夜すがら謡ひ
給ひなば。其時我が姿をも。現し衣の袖
つぎて。移り舞を舞ふべしと。いふかと
見れば。其まゝ　かき消すやうに失せに
けり　かき消すやうに失せにけり

中入

ツレ上　餘りのことの不思議さよ。さらば眞を
おもほえぬ。鬼女が詞を違へじと

ロ上歌（三人）待謠　松風共に吹く笛の。松風共に吹く笛の。聲澄み渡る谷川に。手まづ遮る曲水の。月に聲澄む深山かな月に聲澄む深山かな。

後シテ一声　あら物凄の深谷やな。あら物凄の深谷やな。寒林に骨を

うつ。靈鬼泣く泣く前生の業を怨む。
深野に花を供ずる天人。返す返すも
幾生の善を悦ぶ。いや善悪不二。何
をか怨み何をか悦ばんや。萬箇目前の
境界。懸河渺々として巌峨々たり。
山また山。いづれの工か青巌の形を。
削りなせる。水復水。誰が家にか碧潭

の色を染め出せる　恐ろしや月も
木深き山陰より。其さま怪したる顔
ばせは。其山姥にてましますか　そも
はや穂に出て初めし。言の葉の氣色
にも知ろしめさるべし。われは恐れ給
ひそとよ　此上は恐ろしながら射干
玉の。闇まぎれよりあらはれ出づる。姿

詞ハ人なれども 髪ハ荊棘の雪を
戴き 眼の光ハ星の如し さて
面の色ハ さ丹ぬりの 軒の瓦の
鬼の形を 今宵始めて見る事を
何にたとへん 古への 鬼一口の
雨の夜に。鬼一口の雨の夜に。神鳴り
騒ぎ恐ろしき。其夜を思ひ白玉か何

ぞと思ひし人までも。我が身のうへになり
ぬべき。浮世語も恥かしや浮世語も
恥かしや。シテ詞 春の夜の一時を千金に
代へじとは。花に清香月に影。これは
願のたまさかに。行き逢ふ人の一曲の。
その程もあたら夜に。はやく謡ひ給ふ
べし ツレカヽル上 げに此上はともかくも。いふに及

ざぬ山中よ　シテ〽一聲の山鳥羽を敲く
ツレ〽鼓は瀧波　シテ〽袖は白妙　ツレ〽雪を廻らす
木の花の　シテ〽何はのことぞ　ツレ〽法ならぬ
地〽よし足引の山姥が。よし足引の山姥が
山めぐりするぞ苦しき　シテ〽それ山と
いつぱ塵土より起つて。天雲かゝる千
丈の峯　地〽海は苔の露より滴りて。

波濤を疊む。萬水たり・一洞空しき谷の聲。梢に響く山びとの無聲音を聞くたよりとなり。聲に響かぬ谷もがなと。望みしもげにかくやらん　ことに我が住む山家の氣色。山高うして海近く。谷深うして水遠し　前には海水瀼々として月

眞如の光をかゝげ。後は嶺松巍々と
そして風常楽の夢を破り　折鞭
蒲朽ちて螢空しく去る　諫鼓苔
深うして鳥驚かずとも。云ひつべし
遠近のたづきも知らぬ山中に。おぼつ
かなくも呼子鳥の。聲凄きをりをりに。
伐木丁々として。山更に幽かなり。法性

● 仕舞

峯聳えては上求菩提を現し無明
谷深き粧ひは下化衆生を表して金輪
際に及べり。抑も山姥は生處も知
らず宿もなし。唯雲水を便りにて到らぬ
山の奥もなし。然れば人間にあらず
とて隔つる雲の身を變へ假に自
性を變化して一念化生の鬼女とな

謡ヒ方 二二十 一念・化

出て目前に来れども。邪正一如と見
る時は。色即是空其儘に。佛法あれば
世法あり煩悩あれば菩提あり佛あ
れば衆生あり衆生あれば山姥もあり。
柳は緑。花は紅の色々。さて人間
に遊ぶ事。或時は山賤の。樵路に通ふ
花の蔭。休む重荷に肩を貸し月

もろともに山を出で。里まで送るをり
もあり。又或時は織姫の。五百機たつる
窓に入つて。枝の。鶯糸繰り紡績の
宿に身を置き人を助くる業をのみ。
賤の目に見えぬ鬼とや人のいふらん
世を空蝉の唐衣　拂はぬ袖に置く
霜は夜寒の月に埋もれ。うちすさむ

人の絶間よも。千聲萬聲の。砧よ聲の聲を打つハ唯山姥が業なれや。都よ帰りて世語よせさせ給へと思ふハ猶も妄執ハ。たゞうち捨てよ何事もよし足引の山姥が山めぐりするぞ苦しき。足びきの　山めぐり　一樹の蔭一河の流。皆これ他生の縁ぞかし。

まして我名を夕月の浮世を廻る
一節も。狂言綺語の道すぐに讃佛
乗の因ぞかし。あら御名残惜しや
暇申して。帰る山の。春は梢に咲くかと
待ちし。花を尋ねて山廻り。秋は
さやけき影を尋ねて月見る方
にと山めぐり。冬は冴えゆく時雨の

雲の雲を誘ひて。山廻り廻りめぐりて。輪廻を離れぬ。妄執の雲の。塵積つて。山姥となれる。鬼女が有様。見るや見るやと。峯に翔り。谷に響きて今までここにあるよと見えしが山又山に。山めぐり。山又山に。山廻りして。行くへも知らずなりにけり。

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
観世流改訂本刊行會

使用家の特權

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、返送料を添へて發行所へ送附せられば、裝訂所は無料にて五番綴の美本に仕立直し返送可申上候。かくして使用家は期せずして一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正六年十一月廿日印刷
大正六年十一月廿五日發行

大正本 一番綴

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金属版印刷所